

浪江の こころ通信

・第92号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のままで掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第92号」への
感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592

双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2

「浪江のこころ通信」宛

FAX.0240(34)4593





▲子供たちやお年寄りにもその場で参加してもらえる曲なども工夫しています



▲活動を「育休」中のメンバーも集まり、にぎやかな練習となりました

ているから、辞めないで」と言われて、やっぱり続けようということになりました。その人もあんまり来られないんですけどね(笑)。

鈴木さん 私たち自身も、お互いに会うのが楽しみでやってい

るところがあります。集まるとまずしゃべってしまつて、練習がなかなか始まらない(笑)。練習も楽しみだけど、久しぶりに会ってしゃべるのも楽しみです。

佐々木さん イベントに出ると、練習に來られないメンバーも見に来て「やってもらってよかった」と言ってくれます。今は踊る側と見る側に別れていても、同じメンバーとしての気持ちのつながりがある。だから、大変だけどやっている意味があるな、と思います。

◆佐々木さんは浪江町民ではありませんでしたが、震災後にメンバーになりました

佐々木さん 私はもともと本宮市のチームで踊っていたんですが、メンバーが減って震災の少し前に自然消滅してしまつたんです。そのまま離れるのもつたいないので県のよさこい振興会のサポーターをしていたんですが、たまたま家が近くなつた常盤さんに声を掛けてもらつて。今は宮城県の登米市に引っ越したんですが、そのまま参加しています。機会が無いと全く動かなくなってしまうので、ありがたいです。

常盤さん 震災後に久しぶりに踊ったときは息が切れて大変でした(笑)。やっぱり続けていな

◆避難指示が一部解除になつて、浪江町で練習できるようになりました。町の様子を見てどんなことを感じていますか？

佐々木さん 「信号が点滅信号じゃなくなった！」とか「電車が走ってる！」とか、そういう変化に感動がありますね。

鈴木さん 最初の頃は、子供たちを連れて來ることに躊躇しましたが、今は楽しく來られるようになってきました。今日も「どこ行くの？」「浪江だよ。お父さんのお母さんの家があるところだよ」なんて話しながら來ました。

大原さん 解除になる前は、もう戻ってくる場所ではないという感覚でしたが、以前勤めていた職場の後輩が戻ってきて働いていたのを見てみると「ああ、普通に住めるんだな」と。福島市内に家を建ててしまったので複雑ではありますが。

常盤さん 同世代の人が戻るために家を建て直しているのを知ったりすると、私もいずれは戻ってこようかなと考えたりはしますね。

◆これからの活動の展望について教えてください

常盤さん ここ数年、ずっと同じ曲を踊っていましたが、最近新しい曲を作りました。これまでは「蛙が荒波を越えて故郷に帰ってくる」という内容の曲を復興のイメージに重ねて踊っていましたが、今度は明るくて空に飛ばたくようなイメージの曲にしました。衣装も新しいものを作っています。そうやって少しずつ新しい挑戦もしていきたいですね。

鈴木さん 私は23歳の時にメンバーになつてから15年続けていて、メンバーと結婚しました。子供たちも一緒に踊ったこともありますし、震災後に生まれた娘も旗振りをやりたいと言っているの、これからは一緒に楽しく続けられたらと思います。

佐々木さん 今日、踊れるのは4人ですが、子供を連れて遊びに来てくれる仲間がいます。子供たちが増えてきているので、これから一緒に踊れるようになるのが楽しみです。

大原さん 体力的にきついときもありますが、仲間と一緒に運動できるので心身ともに元氣になれます。そういう場はなかなか無いのでこれからも続けていきたいです。メンバーはいつでも募集していますので、気軽に声を掛けてください！



福島県

Wonderなみえ

常盤 香世さん(川添)・大原 陽子さん(川添)
鈴木 純さん(田尻)・佐々木和子さん(本宮市)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 谷津
取材日：11月10日

活動が続けることがみんなの心をつないでいます

▲前列左から 常盤さん、大原さん
後列左から 鈴木さん、佐々木さん

11月24日と25日、浪江町地域スポーツセンターで「復興なみえ町十日市祭」が開催されました。

昨年に引き続き、十日市祭でのステージ発表に向け、浪江町地域スポーツセンターに集まって練習をしているよさこいチーム「Wonderなみえ」の皆さんを訪ねました。12月には、浪江町仮設商店街まち・なみ・まるしえの「まるしえの日」と同時開催された「浪江ふるさとまつり北海道・東北復興YOSAKOI」でも華麗な演舞を披露。地元よさこいチームとして、各地に引っ張りだこです。これまでの経緯と今の想いをお聞きました。

◆チーム結成からこれまでの経緯を教えてください

常盤さん 平成13年の「うつくしま未来博」の時に、商工会が主導して県内各地によさこいチームができました。

「Wonderなみえ」もその時に発足して、震災前は週2回練習をしていました。小中学生も合わせて50人くらいいたでしょう。震災でばらばらになり「解散するしかないかな」と思いましたが、その年の夏に二本松で開催された夏祭りに「踊らないか」と声を掛けていただいて。メンバーに連絡してみたら、当日は結構な人数が集まつたんです。それで「続けよう」ということになって、それから2、3回、いわき市などで練習をしながら、続けてきました。

◆イベントに出る機会はどうくらいあるのでしょうか？

常盤さん 今年は年に20回以上あります。避難指示が一部解除になつてから増えました。相双地域の他のチームは解散したところもあるので余計に声が掛かるのかもしれないですね。メンバーが各地に散らばっているの、練習には数人しか來られないことが多いんですが、本番にはなんだかんだで15人くらい集まります。LINE(スマートフォン)

フォンやタブレットなどで使用できるソーシャル・ネットワーキング・サービスの一つ)で動画を共有して、それを見ながら各自自宅で練習するなどして、なんとかこなしています。新潟や東京にもメンバーがいるんですけど、本番に駆け付けてくれます。

大原さん 毎月何かとイベントがあるので、それで日々が過ぎていきます。長くやっているのでも、もし無くなつたら何かがすっぱり抜けたみたいになつてしまふと思います。みんな住んでいるところは違うので、活動が無ければ会う機会も無いでしょうから、貴重なつながりです。あまり來れない人とも、LINEでいつも会話していると離れている感じがしないです。お互いの場所で災害があると自然と「大丈夫だった？」と声を掛け合ったりしています。

◆各地にメンバーが散らばっていて大変ではないですか？

大原さん 毎回数人しか集まらないので、何度も心が折れそうになりました。一度「もう辞めよう」ということになったんですが、ある人から「避難先では自分の境遇を分かってくれる人がいない。練習で集まった時にだけ気持ちを話すことができる。それを楽しみに日々頑張っ



（平成29年）の臨時総会で予算化し、編集委員会が発足しました。そして、今年3月の通常総会までに冊子を発行し、皆さんに配ることにしました。昨年4月には各隣組から編集委員を選出してもらい、本格的な活動が始まりました。

井戸川さん 冊子は180ページを超える予定で、「1. 酒井行政区のあゆみ」「2. 酒井の言い伝えと祭り」「3. ふるさと酒井への想いと原発災害を経験して」「4. 資料」の4つの章で構成されています。

特に、第3章は昨年の総会後から区民の方々に執筆をお願いし、電話や訪問をさせていた

高田勝人さん 地区の皆さんは、『編集委員会だより』を通じて冊子の編集状況などを伝え



高田 勝人さん



井戸川さん



中谷さん



高田トシ子さん

きたがら取材し、たくさんの方々の声を掲載できるようにしてきました。

高田勝人さん 酒井は行政区がまとまっており、防災への備えや祭り、農業など、いろいろな取組が盛んでした。私も区長として、毎月『酒井ふるさと会便り』を発行し、情報公開に努めてきました。震災後も作って郵送していたんです。

震災直後は帰りたいと言う声が目立ちました。先への定住も増えてきた

きながら取材し、たくさんの方々の声を掲載できるようにしてきました。

中谷さん 勤務していたJAふたばの社内で地震に遭いましたが、道路は至る所で陥没。山側の道を通ってようやく18時ごろに浪江に戻りました。翌朝、全町避難となり、すでに津島の

避難所は満杯と聞き、南相馬市小高区の妻の親戚を頼りました。2泊だけお世話になり、同市原町区の小学校に避難しましたが、本当に寒かったです。

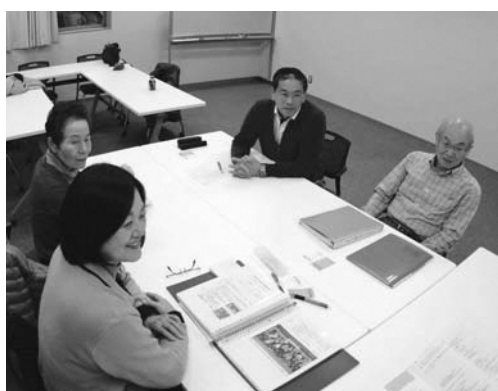
道の駅「南相馬」に移動した時に3号機の爆発を知り、郡山市に避難しました。息子の会社が社員寮をお世話してくださり、今も住んでいます。

井戸川さん あの日は、勤務先の中学校が避難所となったため、被災者対応をしていました。翌朝浪江に戻り、連絡が取れなかった母の無事を確認し安堵しましたが、自宅は手の付けられない状況でした。再び職場に戻ろうとした時、浪江町に避難指示が出されました。実家に寄り、母と妹夫婦と共に小高に向かいました。

夕方には小高区にも避難指示が出されたため、原町区の学校に避難し、被災者で埋め尽くされた体育館で寒い一夜を過ごし、翌日、みんなで姉が住む仙台市に避難しました。2年前に、母は亡くなりましたが、知り合いでもない慣れない地での生活は、とても寂しくつらいものだったと思います。私は学校再開後、なんとか相馬市にアパートを借りることができ、今に至っています。

高田トシ子さん （高田勝人さんとトシ子さんはご夫婦）3月12日

の絆となればよいと思いますよ。



▲インタビュー風景



ふるさと酒井誌編集委員会

高田 勝人さん(編集長)・井戸川あけみさん(副編集長)
中谷 英一さん(編集委員)・高田トシ子さん(編集委員)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：11月30日

酒井の人たちにふるさとの記録を手渡すために



帰還困難区域となっている酒井地区の様々な記憶を集め、記録として残すために、「ふるさと酒井誌編集委員会」が編さんに取り組んでいる『ふるさと酒井』（以下、冊子）は、目下、最後の編集・印刷入稿作業の段階です。編集委員11人の中から代表として4人の方々に、それぞれの暮らしや編さんにまつわるお話などを伺いました。

◆あの震災からの避難の様子や今までの暮らしをお聞かせください

中谷さん 勤務していたJAふたばの社内で地震に遭いましたが、道路は至る所で陥没。山側の道を通ってようやく18時ごろに浪江に戻りました。翌朝、全町避難となり、すでに津島の

◆どのようないきさつで、冊子を発行することになったのですか。編さん中的ことも聞かせください

高田勝人さん 帰りたくても帰れない、ふるさとの記録を残したいという話が出て、一昨年

は甥の結婚式が予定されていたため、前日11日の午後、郡山市の妹の家に向かい、到着後間もなくあの震災が起きました。当時、夫は酒井区長だったので地区のことが気掛かりだったようですが、避難指示が出ていたのでどうすることもできませんでした。

家族で話し合い、私たちは横浜市に住む義姉夫婦の家に避難しました。そして、6か月間お世話になった後、近所の借上げ住宅に移り、現在に至っています。

高田勝人さん 酒井行政区区長として一番先にしたことは、地区の皆さんの安全確認でした。震災直後、高齢者の方々は携帯電話を持っておらず、避難場所を転々とされていた方も多くて、確認作業は大変でした。

震災の翌年から毎年、総会を兼ねた「会えてよかった 来てよかったの会」を郡山市の月光温泉で開催しています。最初の年は全戸住民の7割近くの参加があったんです。